

第8期宇治市生涯学習審議会 会議録

名 称	第8期宇治市生涯学習審議会 第6回審議会						
日 時	平成30年4月20日(金)午後2時～4時						
場 所	生涯学習センター 2階 一般研修室						
出席者	委 員	×	井上 浩	×	佐藤 翔	○	藤林 弘
		○	内田 徹	○	佐藤 るり子	○	向山 ひろ子
		○	奥西 隆三	○	杉本 厚夫	○	森川 知史
		×	木村 孝	○	長積 仁	○	六嶋 由美子
		○	切明 友子	○	西山 正一		
		○	小宮山 恭子	○	林 みその		
	事 務 局	○	伊賀 和彦(教育部長)				
		○	山本 美絵(教育部副部長)				
		○	藤原 千鶴(教育部参事(兼)生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	市橋 公也(教育支援センター長)				
		○	福山 誠一(教育支援課長(兼)青少年指導センター所長)				
		○	宮本 義典(生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹)				
		○	高橋 紀子(生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	上田 敦男(生涯学習課生涯学習係長)				
	○	森川 円(生涯学習課生涯学習係主任)					
	○	太田 悠(生涯学習課生涯学習係主任)					
傍聴者	0名						

会議要旨は、下記のとおりである。

- **委員の委嘱について**
岩井浩委員に代わって、井上浩委員(笠取第二小学校長)を新たに委嘱した。
- **第8期生涯学習審議会委員名簿について**
訂正がないことを確認し、ホームページで公開する。→委員了承
- **第5回審議会の会議録について**
訂正がないことを確認し、ホームページで公開する。→委員了承

1. 報告事項

➤ 平成30年度宇治市教育委員会の事務局体制について

(事務局)

今年度、教育委員会で組織上の大きな変化はなかったが、人事異動による事務局職員の変更があった。

➤ 宇治市教育委員会の所管する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価に関する報告書（平成28年度実施事業）について

（事務局）

教育ビジョンにある施策体系に基づいて、点検及び評価がされている。社会教育部門では、昨年度に引き続き、宇治市子どもの読書活動推進委員会が評価されている。その他、人材バンク及びスポーツ文化の推進についても好評いただいている。全文は市ホームページで確認できる。

（委員長）

生涯学習審議会の活動は、教育ビジョン及び施策体系に基づいていることを、再度確認し、今後の活動の参考にしたい。

➤ 平成29年度宇治市生涯学習人材バンク研修会について

（事務局）

平成30年2月21日（水）生涯学習センターにて開催。当日は17人の参加があった。人材バンク登録講師8人、一般の方9人であった。「自分自身をプロデュースする方策～ソーシャルメディアを活用した価値の発信の仕方～」をテーマに、長積委員長の講座があり、その後、長積委員長と人材バンク登録講師の西山委員による対談をしていただいた。後半は4つのグループに分かれての交流会を行い、各グループによるコラボイベントを企画していただいた。当審議会から2人の委員が参加した。

（委員）

ソーシャルメディアの種類と違いについて分かりやすくご説明いただいた。対談も刺激的だった。人材バンク登録講師は前向きで、相手の良いところを見つけようとする人が集まっているので、コラボイベントの企画もすぐにできた。研修会に参加した友人が、委員長のお話に刺激を受けて、仕事を退職し、就きたかった仕事に挑戦し、転職した。

（委員）

ただ楽しむだけではなく、自分は何を目標にして教えたのかを考えるきっかけとなった。

（委員）

人材バンクの広報は行政任せにするのではなく、自分でアプローチすることの重要性を伝える機会になった。交流会の際に、参加者同士で名刺交換が行われていた。今後の活動に活かされると思う。

（委員長）

名刺交換をしている様子から、誰かと繋がりたいと思っている人が多いと感じた。人材バンクが、地域に仕掛ける際に有効活用できるプラットフォーム（土台・環境）になるよ

うに、研修会や交流の場を作っていただきたい。

➤ 平成30年度宇治市教育の重点について

(事務局)

大きな柱についての変更点はないが、宇治市図書館事業計画の策定により、図書館に関する記述が随所に盛り込まれている。人権教育部分では、法律名を明記した。

(委員長)

計画に基づいて、事業や施策の進行管理をするのも我々の役目である。生涯学習審議会の役割を再認識するためにも、ご活用いただきたい。

➤ 平成30年度社会教育関連当初予算の概況について

(事務局)

例年、夏頃の委員会で説明しているが、今年度は大きな予算見直しがあったので、年度当初に説明させていただく。配付した資料の宇治市財政健全化推進プランをもとに、生涯学習に関する部分では、学校施設、生涯学習センター、野外活動センター、源氏物語ミュージアムの使用料・手数料等が見直された。他に人材バンクは、予算皆減となっている。源氏物語ミュージアム運営費は、リニューアルに関する経費として、約1億4000万円が計上されている。

(委員長)

厳しい財政のなかで、できる限り事業の効率化を図り、効果的にこれまでのサービスを残すように工夫されている。また、今後は受益者負担が進むことも予想される。より豊かな生活を送るために、どこまで市民に負担してもらおうのかを検討しながら、民間の活力やノウハウの導入が全国的な流れであることをご理解していただければと思う。

(事務局)

出張旅費についても見直しの対象となっており、昼食を伴わない半日当地域への出張は、日当を支給しないことになった。委員には昨年度まで、いろんな研修に参加いただいていたが、山城管内等は、日当の支給はできなくなる。その分、予算の制約がなく協議会総会や研修会にご参加いただける。全国大会の予算はなくなったが、近畿大会までの予算はある。いずれも積極的にご参加いただきたい。

(委員長)

全国大会でしか得られないような情報ばかりでなく、様々な分野で様々なネットワークを持っている方が多いので、他の研修機会を活かして、審議会で情報共有をしていきたい。

➤ 宇治公民館（市民会館）について

(事務局)

3月31日をもって、建物は閉鎖したが、宇治公民館事業の予算は確保している。一番大きな事業であった高齢者教室は、生涯学習センターで開催することになり、参加申込人数も昨年と同じぐらいであった。新たな活動場所については調整の結果、公民館サークル30団体、社会教育団体13団体の活動先が決定した。新たな活動先は、中央公民館が一番多かった。また、公民館サークル4団体が解散となった。活動先が決まっていない団体については、引き続き相談を受ける。

(委員長)

利用団体が継続して活動できるように、調整されていると聞いている。今後は、宇治市にある地域の資源を、どのように有効活用していくかを考えなければならない。

2. 協議事項

➤ 宇治まなびんぐ 2018 総括

(委員長)

宇治まなびんぐ 2018 で、市民からいただいた花びらメッセージをもとに、今後の方向性や役割について考えたい。花びらメッセージのまとめは、大人の意見と子どもの意見が分かるように表記されている。このメッセージを読んだ客観的な感想を、2分以内で発表していただきたい。

(委員)

キーワードは「自助共助」であると思う。前向きな意見が多いが、「～してほしい」といった市への要望が目についた。市民の意見が「みんなでやろう」という方向へ行くように、社会教育委員として導いていかなければならないと感じた。また、防犯カメラの増設を望む声があったが、検挙率は上がるが、防犯カメラが多いまちが本当に良いのか考えなければならない。町内会を脱退する人がいないまちという意見は、今の時代をよく表している。少子高齢化が進み、みんなが協力しないとまちが成り立たないようになってきている。そういう意味でも、社会教育委員が市民に呼びかけていかなければならない。

(委員)

防犯カメラ、バリアフリー、花火大会に関する意見が目についた。防犯カメラは、主要な交差点には設置されており、ドライブレコーダーも普及している。防犯カメラの増設が良いかどうかは別として、見られているという意識は持たなければならない。花火大会については、やるやらないの議論だけではなく、何年かに1回の開催にするなどして、開催場所の提供を検討できればと思う。

(委員)

笑顔や元気があふれるまちという意見が多かったが、このまち全体に元気や活気がないと感じている方が多いのかなと思った。具体的には人にやさしい道路の整備、子育てや教育がしやすい環境、文化活動を活発にしてほしいという願いを持っている方が多いと感じ

た。

(委員)

87件の意見のうち約4分の1が子どもの意見である。高齢者だけでなく、子どもたちの望みを叶えられるようなまちを作らなければならないと感じた。宇治まなびんぐ2018に出展していた地域防災を考える会では、花びらメッセージを参考に、次回の出展内容を検討していた。生涯学習審議会ですることが、他の団体に波及していると感じた。

(委員)

心配りができる豊かなまちが良いと思う。大学で、学生が話しながらエレベーターに乗り、その後が続こうとしたらドアを閉められてしまった。話に熱中していたからだと思うが、周りを見渡す余裕があればと感じた。自分のことばかり考えるのではなく、困っている人に声をかけられるような、ホスピタリティ(もてなし)のあるまちにできれば良いと思った。

(委員)

花びらメッセージの内容を大きく5つに分類した。自然を守り美しいまち、平和への願い、まちの整備・安全なまち、子育て支援、市民が大事にされるまち。どの項目も、行政がすることと、市民ができることに分けられる。何ができるか考えたが、市政だよりの裏面に生涯学習審議会からのメッセージを掲載してはどうか。掲載できるかは分からないが、そういった方法もあると思う。

(委員)

耳触りの良い言葉が並んでいるが、それを誰がするのかというところに行きつく。自分がどのように行動すれば、市民が望むまちができるのか分からない。「誰がするのか」の「誰」を見つけない。

(委員)

平凡でも当たり前前に幸せを実感できることが望まれている。これは子どもにも共通している。そのなかで、「自分らしく」があるなら、「宇治らしく」も考える必要がある。「当たり前」と「まちの売り」を上手く共存させなければならない。また、まちに対する主体者意識を生み出すことが重要だと感じる。主体者意識を生み出すことが、自助・共助・他人への思いやりに繋がる。市民ひとりひとりが主役であり主体者であることを伝えなければ、他人事なまちになってしまう。

(委員)

市民が同じ思いを持っていることに気付くことができた。ドイツの高速道路の入口は、料金所はないのに、譲り合いで混む。まちもきれいで、ごみも落ちていない。市民の意識が高いからだと思う。市民の思いを実現させるには、市民の意識を高めなければならない。そのために、生涯学習審議会が動かなければならないと思った。

(委員)

「してほしい」を「しなければならない」に導かなければならないと思った。意識が高い人が地域で頑張らなければいけない。ドイツの高速道路の話と同じだが、イギリスでは横断歩道は安全だが、日本では横断歩道が一番危ないように思う。

(委員)

子育て家庭にとって暮らしやすいまちについて考えた。犯罪が少なく、安全で、近くに病院があり、働く場所があり、買い物がしやすく、子育て支援サービスがあるまち。食育の視点から考えると、ライフスタイルの多様化に伴い、家族揃って食事をする時間が減っている。それは、各家庭だけの問題ではない。気軽に栄養相談できるような場があれば、より暮らしやすいまちになると思う。

(委員)

安心感がないから、誰かに助けを求める気持ちが生まれるのではないか。交通の面で、若い頃に宇治市に引っ越してこられた方が、年をとって、宇治市が住みにくいまちであることに気付いたという声があった。最近宇治市に引っ越してこられた方のお話から、宇治市にいれば当たり前のことも、他市から見れば不便に感じることもあると気づかされた。メッセージの中に観光地として望むことがなかったのは意外だった。来年も同じように出展するなら、「こういうまちにするために、あなたは何をしますか？」という問いかけを試みてはどうか。

(委員)

具体的な子育てに関する意見が目についた。個人的なことだが、孫が保育園に入園する時、申し込みに苦労した。全国的に子どもは減っているが、働く母親は増えているので、保育園の入園は厳しい状況だ。安心して働ける環境が必要だと感じる。また、朝の母親は時間に追われて余裕がない。自分の手間を減らしたいという思いが切実である。保育園の園長が、気遣ってくれる声かけがとても嬉しい。何ができるわけでもないが、声かけが自然にできるまちになればいいと思う。

(事務局)

「してほしい」ではなく「何ができるか」を考える人を育てるために、行政としてやらなければいけないこともある。市民がしなければいけないこともある。みなさんの意見を聞いて、行政と市民が「共に良くしていこう」と同じ方向に向くことが大事だと感じた。

(委員長)

宇治市を市民と一緒に作り上げていくという視点が重要だと思う。たくさんキーワードを挙げていただいたが、身近な生活に関わるメッセージが多い。行政が担うべき役割だけでなく、市民が主体者であることを実感し、実現できるようなまちづくりを我々が提案

第8期宇治市生涯学習審議会 会議録

しなければいけないと思った。昨年の意見をもとに、こんなまちにするために、あなたはどんなことができますか？と聞く案は良いと思う。自分のためだけではなく、同じ地域に住む人を慮るためにできることを考える機会を仕掛けていくことが、生涯学習審議会できれればいい。この後、どのようなテーマを進めるか考えなければならないが、みなさんの意見を聞いて何か感想はないか。

(委員)

「前はこうしてもらっていたから、ここでも同じようにしてほしい」という要望が多い。

(委員長)

行政サービスのあり方そのものを問わなければいけないかもしれない。自分たちの活動を作り上げることに主体者意識を持ってほしい。自分たちのまちは自分たちで作り上げるということに気付いてもらえるようなことができたらいい。

(委員)

これまでが、あまりにも融通の利く良い時間を過ごしてきたため、受け入れられないのかもしれない。

(委員)

まちづくりをするための生涯学習のあり方を考えなければならない。80年代の理論としてコミュニティ理論というのがある。コミュニティという言葉が使われるようになったのは70年代から。それまでは、村落共同体とよばれていたが、共同体が維持できなくなり、近所付き合いが希薄になっていった。そこで出てきたのが、伝統的アノミーモデルである。地域のことを良くしてくれることは、地域のことを思ってくれている人がしてくれるので、自分には関係ないという地域モデル。次に出てきたのが、個我モデル。自分に不利益なことは行政にしてもらおうという権利意識が強く、客体的な地域モデル。今は、その段階にあると思う。その次にあるのがコミュニティモデルで、地域のことは地域の人たちが良くしていこうという考え方で、このモデルが最終着地点だと考えられている。個我モデルからコミュニティモデルへの転換に、生涯学習ができることを考えていく時期にきている。

(委員長)

不利益に意識が向き、個我モデルに回帰しているように思う。目先の不利益に対する気持ちを受け止めながらも、将来のことを提案するために、生涯学習として何ができるのか考えなければいけない。市民ひとりひとりが主体者意識を持つためにどういったことを提案するのかということが課題である。

(委員)

広域的な災害が起きたとき、公助はなく、共助のなかの近所しかない。地域再生の切り口として災害対策が有効だ。そのために、生涯学習審議会ができることを考えなければな

らない。

(委員)

生涯学習で意識改革はできる。公助のなかのひとつとして行政があり、「私」か「公」しかない。「公」は「私」によって作られているという発想がないので、行政との対立構造が生まれてしまう。

(委員長)

共助が成り立たないので、自助に向かう流れがある。自助は良い意味でもあるが、ひとりでは実現できないことがあるからこそ、公助や共助があるはずなのに、そこに期待できないので、自助に向いていることを危惧している。

(委員)

災害が起きて地域が孤立した際に、地域の人たちが自然に集まって、それぞれ役割分担をして対応していた。しかし、自分のことだけになってしまう地域もある。同じ宇治市内で、なぜ違いが出てしまうのかと疑問に思う。

(委員)

役割分担ができていた地域に住む人の中には、その地域出身の人だけではなく、他の地域から来られた方もいる。それなのに、自然に役割分担できるのが素晴らしい。リーダーはいるのか。

(委員)

リーダーはいる。すぐ連絡できるようになっている。

(委員長)

地縁・血縁以外でも結びつくことはできる。学習の機会を作り、そこで地域の共通課題を上手く提示して、その解決策を探ることが結びつきを強くする。その仕組みを提案しなければいけないと思う。教育振興基本計画の進行管理や教育の重点を守りながら、今日いただいたキーワードや話をもとに、生涯学習審議会ではかできないことをどのように提案していくのか、今後の審議会で協議していきたい。

3. その他

➤ 平成30年度社会教育事業について

(事務局)

日程が発表されている今年度の予定をお知らせしておく。主なものを挙げておく。

- ・京都府社会教育委員連絡協議会総会（6月29日大山崎町）
- ・京都府社会教育研究大会（11月22日宇治田原町）
- ・近畿地区社会教育研究大会（9月7日和歌山市）
- ・やましろ未来っ子みんなでHUGフォーラム（6月24日宇治田原町）

第8期宇治市生涯学習審議会 会議録

・山城地方社会教育委員連絡協議会総会（6月15日久御山町）

- **最後に**

（委員長職務代理）

宇治まなびんぐ 2018 でいただいた花びらメッセージから得たヒントをもとに、今後も協議を進めていきたい。

<次回の会議について>

平成 30 年 6 月 18 日（月）午後 2 時 00 分から 生涯学習センターにて